

いわみざわの民話

第25回

いわみざわの民話は、平成9年に「いわみざわの民話」刊行委員会が発行しました。

昔のこと 開拓最後の斧①

少年の頃父の使いで近隣の部落に出されるときに、目的の家を示される方法として開拓時代に残された大木や森が利用された。

その多くは赤ダモの木であったようである。東川向のごくそここの家は裏の幾春別川の川辺に赤ダモの木が2本あるとか、三笠山村の市来知の誰々の家は第1防風林をすぎて右手の道路2本目を入ったところとか、その当時は古木や森が道標として利用されていた。

現在の岡山橋、といっても旧の太鼓橋は昭和9年頃より鉄骨の橋となるため基礎工事が始められていた。この岡山橋のふもと岡山側に、開拓の名残りを止める大きな赤ダモの木が1本残されていて、樹齢数100年というのであったであろう。私達こどもが5、6人寄って手を伸ばし抱えても余る根回りがあって、高さは40メートル以上でなかったかと記憶している。



とにかく当時高いものをはかる物尺のかわりに、岡山橋の赤ダモの木より高いかということが合言葉の1つであり、郷土の誇りとして近隣はもとより遠くの人達にも知られていたものである。

昭和10年の晩夏、この赤ダモの木の下に3人の士族移住者が集まった。士族移住者の森下勝蔵(当時69歳)1人は移住者2世の岩田喜久馬(当時63歳)あとの1人は同じく2世の松本静男(当時54歳)日露戦争の勇士の3人で、いずれも明治18年士族移住により鳥取県より入植した1世と2世で、鳥取県の旧はん士であった。この3人の開拓者に託された使命

は、岡山橋が永久橋に架け替られるに当たって、国道の幅員を広げるためには由緒ある赤ダモの木を伐さねばならなかったため、大木を伐木できる経験者として特に赤ダモの木に隣りする関係から依頼されたものであるが、当時の若い人達は大きな木を伐す術を知らなかったため、この3人の開拓者が選ばれたことは理由のあったことである。

この3人の開拓者は明治18年に移住した折、官給として与えられていた大鋸、大マサカリを持ち出していた。わけても几帳面な岩田喜久馬は数日前から3人の大鋸の目立をし大マサカリをとぎすませていた。大鋸と大マサカリの柄は幾十年も使っていたが故でもあろう、つやをすっかり失っていた。

とぎすました大マサカリの刃が暑い陽射しににびい光を放っていた。

《続く》

第26回は「昔のこと 開拓最後の斧②」を紹介します。

発行・編集 岩見沢市総務部秘書課

| ひとの動き 平成24年2月28日現在 | |
|--------------------|------------------------|
| ●住民基本台帳 | 人口 総数 89,305人(前月比 -56) |
| | 男 41,888人(前月比 -26) |
| | 女 47,417人(前月比 -30) |
| 世帯数 | 42,421世帯(前月比 -13) |

岩見沢市役所

☎068-8686 北海道岩見沢市鳩が丘1丁目1番1号
☎0126-23-4111 ㊚0126-23-9977

ホームページ <http://www.city.iwamizawa.hokkaido.jp>

▶救急当番医ガイド ☎0126-23-5153
▶消防テレホンガイド ☎0126-24-0119

この広報紙は道産間伐材配合紙を使用しています。